

書評

石谷治寛

『幻視とレアリズム——クールベからピサロへ
フランス近代絵画の再考』

人文書院、2011 年

武田宙也

本書は、2009 年に京都大学に提出された博士論文をもとにして執筆された、著者にとって初の著書となる。近現代の西洋美術を専門とする著者が本書で取り組むことになるのは、フランスの近代絵画、とりわけギュスターヴ・クールベとカミーユ・ピサロという、19 世紀に活躍した二人の画家にスポットを当てたレアリズムと印象主義の再考である。周知のように、この時代のフランスは著名な画家を多く輩出しているが、本書でとりわけこの二人が議論の俎上に載せられるのは、いかなる意図からであろうか。

まずクールベとピサロが、ともに当時のアナキズムの理論家たちと親しかったという事実を考慮するならば、この二人の画家への着目からは、両者の作品を通じて、19 世紀の激動する社会と芸術との関係を根本から問い直そうとする著者の意図がうかがえるだろう。それは、新たに誕生した大都市を中心として起こっていた急激な変化のなかで、当時の芸術家たちがどのようにそれらの社会変革に関わろうとしていたのか、その意識と実践を明らかにする試みである。

また著者は本書の中で、いわゆる「芸術の社会史」や「視覚文化論」といった近年の 19 世紀芸術研究の成果を引き継ぎつつ、フランス近代絵画を同時代の科学および哲学の言説と照応させる形で再考していくことになる。著者は、この分野で日本でも著名な美術史家、ジョナサン・クレーリーの翻訳に携わった経験も持つが、クレーリーも指摘しているように、19 世紀とは、人間の視覚というものが、カメラ・オブスクーラのような幾何学的な表象装置ではなく、生理学的身体への反応と不可分なものだということが明らかになってきた時代であった。すなわち視覚とは、外的な現実をたんに無媒介に写し取るものではなく、人間の側の「生産力」に依存する面がきわめて大きなものだということである。この時代には、こうしたいわゆる「人間的視覚」をめぐるさまざまな科学的言説が繰り返され、一方でそれら 19 世紀の科学は、具体的な技術と結びつくことで人間に対する規律や統制といった側面を強めてもいった。この知と権力の交点に位置する「人間的視覚」として、本書でとりわけ重視されるのが、「夢想」や「幻覚」といった現象である。これらの現象は、19 世紀に人間の「正常な」知

覚のネガティブとして、それを裏面から理解する鍵と考えられるようになっていったのである。

ここで冒頭の問いに戻るならば、本書におけるクールベやピサロへの注目は、この「夢想」や「幻覚」というテーマが、とりわけ彼らの作品にさまざまな形で表現されているという事実にも由来する。彼らにとってこれら「幻視の領域」は、同時代の現実との接点であると同時に、その変革の賭け金ともなっているのである。本書は、科学的な言説と技術的な実践とが手を取り合い、人間の生をますます精緻な仕方で包圍しつつあった近代という時代に、レアリズムと印象主義がそれに抗して開いた「新たな幻視の領域」を明らかにする試みということもできるだろう。

さて、以上のような本書の問題意識を念頭に、以下では各章の内容について概観していきたい。本書は全7章からなり、全体は3部構成となっている。まず第1章と第2章からなる第1部では、クールベを中心として、近代の美学・芸術における主体の表象が問い直される。第1章では、クールベの肖像画を、写真という当時台頭しつつあった新たな表象技術と比較検討することで、それが、自我の同一性が不確かになった近代において、主体の新たな現実性を提示するものとして位置づけられる。当時の肖像写真の「真理」が、その細部の正確な再現よりもむしろ、鑑賞者のなかに想起される身体的・主観的な現実性のなかにあると考えられたように、クールベのレアリズムもまた、対象の単に正確な再現よりもむしろ、あくまで人間の「体感」に根ざした錯覚や幻覚を、そしてそれを通した現実性を捉えようとしたものであった。こうしてレアリズムは、「科学によって同定されようとする主体のモデルに対する、不安や反駁あるいは嘲笑や抵抗」(22頁)を表明することになるだろう。その意味でクールベの肖像画は、この「不確かな身体感覚の現実性」を信じようとするからこそ、「個体の感受性や自我の基盤となる」(49頁)ことを示しているといえるだろう。

一般に「ありのままの現実を描くこと」を特徴とすると言われるレアリズムだが、実際にはそこで選択されている主題は、神話をはじめとする物語と無縁であるところではない。第2章では、とりわけクールベにおける「眠る裸婦」と「りんご」のモチーフが取り上げられ、それが有する、夢と現実のあわいに位置するような寓意が分析される。この二つのモチーフは、パリ・コミューンの直後にサロンに出品された二作の絵画の主題ともなっている。そこからは、クールベ自身も深く関わり、同時に大きな挫折を味わうことになったコミューンの記憶と、これらのモチーフとの連関が推察できる。すなわちそれらは、クールベにとっての「革命の夢」を反映するものだと考えることができるのであり、またそこには、「個人の欲望だけでなく集団的で社会的な葛藤が具現化されている」(89頁)ので

ある。

続いて第3章から第5章までの第2部では、ピサロを中心として、農村労働の現実の表象が検討される。まず第3章では、1880年代にピサロが描いた二つの《りんご採り》の絵の比較から、近代化にともなう農村の変化への彼の批判的な眼差しが明らかにされる。農村をめぐるのは当時、「一方で、労働する身体の強制的な自動化と、他方で、地方の理想的な田園としての自然化」（123頁）が展開しつつあった。著者によれば、ピサロによる1880年代の二つの《りんご採り》のうち、最初のものでは「農婦たちの連合というオルタナティブな理想」が表現されていたのに対し、二つ目のものでは「その連帯は分断され見せかけにとっかわりつつある」（123頁）ことが見てとれるが、それはまさにこうした変化に対応するものだという。こうしてピサロは、農村を外在的にも内在的にも変質させようとするひそかな、しかし確かにせまりつつある危機を警告したのである。

第4章では、ピサロが描いた一連の「休息する農婦たち」のイメージがメランコリーという観点から論じられる。18世紀末以来、メランコリーは崇高さの気質に結びつけられて評価されてきたが、19世紀末になると、同時代の精神病理学のなかでそれは「疲労」という概念にとっかわられ、精神的・身体的な障害と同一視されるようになる。こうした労働の科学的管理に対してピサロは、「休息する農婦たち」のイメージなかに、それに抵抗するような「夢の領域」を確保しようとするのである。さらに第5章では、この労働と疲労の問題が、同時代の工芸運動との関わりのなかで検討されていく。というのも、「近代の工芸運動の展開の背景には、労働の改善がつねに喫緊の課題としてあった」（175頁）からである。ピサロやアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデは、加速度的に進んでいく労働の機械化・効率化という現実を前にして、新たな様式の工芸や装飾を通して、身体リズムの復調をはかったのであった。

最後に、第6章と第7章からなる第3部では、クールベとピサロがともに取り組んだ自然や都市の表象を分析することによって、19世紀の社会と芸術の関係が「場」や「環境」という観点から浮き彫りにされる。まず第6章では、クールベの原初的な自然を描いた風景画とクロード・モネやピサロの近代化する風景を描いた連作が対比され、そこに「大地と自然の進化の過程」が見て取られる。また第7章では、とりわけピサロの晩年の都市連作が検討され、そこから都市およびその群衆をめぐる、映画という新たなマスメディアの登場にも議論は及ぶ。

本書の締めくくりとなる結論部で著者は、19世紀において「環境と個人との関連を表す重要な概念」として「調和」と「自由」を挙げたうえで次のように述べる。「調和と自由のヴィジョンは、外的世界の知覚と自己の微細な体感との不協和を通して、それらの関係を無意志的に調整しようとするときに生じる。クール

べやピサロは、出来合いのユートピアのイメージをでっち上げるより、幻覚や疲労といった不調和のイメージを通して、同時代の現実を示唆すると同時に、対立する要素の協調や均衡の夢を思い描こうとしたのであった」(239～240頁)。この「調和」は、つねに「闘争」や「葛藤」といった不和の調整という形をとる。そして、この調整のためにクールベやピサロが訴えたものこそ、「夢想」や「幻覚」と結びついた、むしろ不調和なイメージであった。

このように見てくれば、本書のタイトルになっている「幻視」と「リアリズム」の関係はいまや明かだろう。19世紀には、急速に進展する近代化によって、社会という現実とそこに生きる人々との間にさまざまな軋轢が生じ始めていた。それに対してクールベとピサロが試みたのは、多様なイメージからなる「新たな幻視の領域」を開示し、それらの不和を調整することであった。それは、幻視を通じて現実に触れるという意味では、「幻視によるリアリズム」ということもできるかもしれない。社会における芸術の役割がますます問われるようになってきている今日、19世紀の芸術家たちの「幻視によるリアリズム」から学ぶべきことは多いだろう。このように本書は、膨大な資料の渉猟と作品への確かな眼差しによってフランス近代絵画に新たな角度から光を当てるのはもちろんのこと、そこから現代の美学・芸術学にとってもアクチュアルな問題を示唆するというように、狭義の美術史の枠組みを越えた意義をそなえており、その意味では、広く思想文化論に興味を持つ読者に開かれた一冊といえることができるだろう。